

## 第4章 オマーンにおけるイスラームの始まりと正統カリフ時代の終焉まで

オマーンの人々がイスラーム教に改宗した始まりは有名な教友であるマーゼン・ブン・グドバ・ブン・スパイア・ブン・シャマーマ・ブン・ハヤーン・ブン・ムッル・ブン・ハヤーン・ブン・アビーバシャル・ブン・ハターマ・ブン・サアド・ブン・ナブハーン・ブン・アマル・ブン・アルガウス・ブン・タイより先だっていたことは隠しようもない。彼（マーゼン）はサマーイルの一族の出自であった。オマーンにイスラーム教が現れた最初の時期に、彼は神の使徒の元を訪れ、イスラーム教に改宗した。そして預言者は彼とオマーンの人々に善きことがあらんことを、と祈った。彼に関して伝えられている事には、サマーイルにおいてジャーヒリーヤ（イスラーム以前の時代）にナージルと言われる彼の偶像の守り人であった。ハターマの子孫達やタイの出自のアッサーミトの子孫達がその（偶像）を偉大なものとしていた。

マーゼンは次の様に言っていた。「我々は或る日、偶像の元で子羊を見つけた。そして偶像から次の様に言っている声を聴いた。嗚呼、マーゼンよ、聞け、喜ばされることを。即ち汝が聞くものが、汝を喜ばすであろう。善行が現れ、邪悪が隠れた。ムダル一族から偉大なる神の宗教を伴って送られた。故に石で出来た悪を捨てよ、地獄（サカル）の灼熱から救われ様に。それ（サカル）とは（地獄の）業火の名前の一つである。神が我々をそれ（業火）から守って下さらんことを」。

マーゼンは次の様に言った。「それ故私は驚いた。数日後、我々は別の子羊を見つけた。そして偶像から次の様に言っている声を聴いた。我の下に近づけ。知られていないことを聞く為に近づけ。これは送られてきた預言者である。形而された真実を持って来た。彼を信じよ。石により火の燃料が燃やされている業火の熱さから汝が身を避けるために」。

つまり私は次の様に言ったのであった。「正にこの善行が、私に対して望まれていることは、正にそれが驚くべきことなのである。即ちこの様な言葉は、偶像から出現した驚くべきことであった。そしてそれ（偶像）は彼（マーゼン）に懲戒を与え、訓戒を与えたのである。次の様に言われた」。つまり我々が（上記）の様である時、即ち我々が偶像から我々が聞いたこの状況について話している時の事であったが、それはヘジャーズの人々の出自の男が、我々の元にやって来た時に、彼は預言をもたらすであろう事は疑いがない、と言うものであった。つまり彼に我々は次の様に言った。「汝の後ろにあるものは何だ？すると彼は言った。アハマドと言われるアラブ人の出自の男が現れた。彼は彼の元に来る者に言うのである。神の布教者の呼び掛けに応えよ。すると私は言った。これは偶像から聞いた預言である。それから偶像の元へと立ち上がり、それからそれを粉々にした。それから私は自分の駱駝に乗った。つまり神の使徒の元へ赴いて、そしてイスラームに改宗した」。（歴史書）オトビーによると、来訪者（マーゼン）は次の様に言った。即ちムハンマド・ブン・アブドラー・ブン・アブドルムッターリブ・ブン・ハーシム・ブン・アブドマナーフと呼ばれる男が現れて、彼の元に来る者に言うのである。神の布教者の呼び掛けに応えよ。つまり私は尊大でも、圧制者でも、高慢でもない。私は汝達を神へと呼び掛け、偶像への崇拜を放棄するように呼びかける。そして我は汝に、その幅が空と大地の如き天国に関しての吉報を告げるのである。そしてその炎が消えることがなく、そこに住む者が安らぐことのない燃え上がる業火から汝達を救いに来たのである。マーゼンは次の様に言った。「つまり我は言ったのである。この事は正に神にかけて、我が偶像から聞いた預言である。それから我は飛び掛かり、それを粉々に、つまりばらばらに壊したのであった。そして我は自分の駱駝に乗って神の使徒の処にやって来た。それから我は彼に、何が彼にもたらされたのであったかについて尋ねた。すると彼はイスラームについて我に解説した。そして神は正しい道へと我の心に光を当てた。それから我はイスラームに改宗して、そして次の様に言った。

我は（偶像）ナージルをばらばらに壊した。それはかつて我々の主であった。

我々は彼の周囲を迷わされ、迷いながら回り、

（ムハンマドの）ハーシム家によって、我々は我々が迷った処から、彼に正しい道に導かれた。

そして彼の宗教は心の中では恩恵であることはなかった。

即ち我は彼の宗教を考慮せず、予期せず、そしてとうとう神は我に彼をもって祝福与えて下さった。

そして彼は私を彼（神）に導かれた。この事は天空の人々にとって保存された天啓の幸運の一つである。そして言った。

嗚呼、騎手よ、アマルとその兄弟達に伝えるがよい。

我が主がナージルであると言う者に対して、我は彼から離れてしまった。

（歴史家の）アルアトビーは次の様に述べている。即ち、彼の言葉「アマルに伝えよ」の中にあるアマルとは、アッサーミトの一族の事を指し、彼の名前はアマル・ブン・ガナム・ブン・マーリク・ブン・サアド・ブ

ン・ナブハーン・ブン・アルガウス・ブン・タイである。また彼の言葉「彼の兄弟達」、もしくは別の伝承には「その兄弟達」とあるが、ハターマ・ブン・サアド・ブン・ナブハーン・ブン・アルガウス・ブン・タイの一族のことを指しているのである。マーゼンは言った。それから私は次の様に言った。「嗚呼、神の使徒よ、貴方の上に神の祝福と平安があらんことを。そして貴方の家族にも。オマーンの人々の為に、崇高なる神に祈って下さい」。すると彼は言った。「嗚呼、神よ、彼等を導き、彼等に報酬を与えて下さいますように」。

即ち(意味するところは)、「神よ、彼等に正しい導きと報酬を与えて下さいますように、もしくは報酬の中のもの、それは帰着があり、即ち神よ、彼等に真実に帰着すると言う報酬を与えて下さいますように」と言うことであり、それ(真実)で言わんとすることは、イスラームである。

マーゼンは言った。「それから私は言った。嗚呼、神の使徒よ、もっと私に多くのものを付け加えて下さい」。すると彼は言った。「嗚呼、神よ、彼等に差し控え(つまり保持)そして充足(つまり満足)そして貴方様が彼等を評価したことに對しての満足(つまり貴方様の評価に応じて、と言うことであって、貴方様の力に応じて、と言うことではない。何故なら神の力は存在全てがそれに敵わないからである)と言う報酬をお与え下さいます様に」。

マーゼンは次の様に言った。「私は言った。嗚呼、神の使徒よ、海が我々の隣でとうとうと流れております」。つまり(海は)我々から近くにある、と言うことであり、即ち我々の国は海から近くにあり、それ(我々の国)とはオマーンのことを言わんとしているのである。

それから神に我々の供給物や蹄のあるもの、そして偶蹄目について祈って下さい。供給物とは食べ物、蹄のあるものとは、駱駝と牝牛のことである。また偶蹄目とは羊や山羊の等のことである。すると使徒は、彼に神の祝福と平安があらんことを、次の様に言った。「嗚呼、神よ、彼らの供給物を広げ、海からの彼等の善きものを増やして下さい」。私は言った。「私に(祈りを)もっと増やして下さい」。すると彼は言った。「嗚呼、神よ、彼ら以外の出自の敵を彼等の上に下されることをお止め下さいますように」。つまりオマーンの海はかつて絶対的に、様々な海の中で、彼等に対して善きものを増やしていた。

神の使徒は言った。「嗚呼、マーゼンよ、アーミンと言え。つまりアーミンとは、彼(神)の御許で祈りが応答してくれることである」。即ちアーミンの言葉は、神の御許で祈りが応答してくれる為の要因である。同様に知の導師達が伝えた諸伝承においても正しいものであった。彼等はこの短い言葉の解説において文章を長いものとした。つまりムスリムが彼の為にもしくは彼以外の為に祈るそれぞれの祈りの直後に、(アーミン)が言われなければいけない。それ(アーミン)は世界の主の封印なのである。マーゼンは言った。「それから私は、アーミンと言った」。その意味は正しく応えて下さるように、と言う動詞の機能を持つ名詞なのである。

## マーゼンが自分の状況に関して神の使徒に不満を言う(P.108)

マーゼン、彼に神の慈悲があらんことを、彼が幸運であったのは、預言の信頼性を知り、信仰の純粹さを確かめ、彼の心の中にイスラームが根付いたとき、神の使徒に不満を言えたことであった。

彼は次の様に言った。即ち、「嗚呼、神の使徒よ！私は、快樂が堪らなく欲しい、葡萄酒が堪らなく飲みたい、また女には固執している。そしてそのため私の財産の殆どが枯渇した。だから神に祈って下さい、私が見出すものを私から去らせ、私の目が近付き、我々に命をもたらす子供を私に与える様に」。

すると預言者は言った。「嗚呼、神よ！彼に快樂の代わりに、クルアーンの朗誦を、神の禁じたものの代わりにお許しになったものを、私通即ち、姦淫の代わりに性交の慎みを、葡萄酒の代わりに罪を含まない浄化水を、そして彼等に生命をもたらして、彼の目が近づく正しい子供をお与えください」。

マーゼンが言った。「至高なる神は、自分が見つけた快樂とその理由の為の活動を私から取り去られた。私は巡礼をし、クルアーンの章句を暗記し、アラブの4人の妻と結婚し、子供一人を授かり4代、6代の父親方の名前からハヤーンと名付けた」

その年以降、オマーンは土地が肥え、駱駝が彼等の元に近付き、海の漁が増加し、そして商業の利益が出るようになった。オマーンの人々の多くが安全で安定した。この事は、上述のマーゼンが彼に従う人々の中にイスラームの普及をしたことを示している。神は、この上述のマーゼンを通して、人々をイスラームに改宗することに成功し、彼らは改宗したのであった。そしてオマーンでは、彼の神への祈りにより、大きな祝福が現れたのであった。オマーン、その全てに(イスラームが)一般化した、神の使徒が次の様に言ったからである。「嗚呼！神よ、彼等を導き給え。と言うのはオマーンの人々がアラビア半島の民で最も正しい道を歩み、そして彼等の中で最も信仰に誠実であるからである」。それが示しているのは、オマ

ーンの民以外の殆どのアラブ人が、イスラームに反抗したり、排除したからであった。つまりオマーンの民は、それ以来、彼らの信仰に固く守り、何も変えなかったし、(守るべき)事を他の事に換えなかったのがあった。

イマームが言った。その事をマーゼンは次の詩で言っている。

貴方様の下へ、神の使徒の下へ、私の乗り物は駆けて行った。  
オマーンからアラジュへと砂漠を越えて。

アラジュは光り輝くマディーナの近く場所で、その示すものはマディーナそのもののことであった。また言った：

私の為に取り成して下さい、嗚呼、肥沃土に踏み分け入った人達の中で最も善き人よ。  
つまり主が私をお許しになり、私はファラジュを伴って戻る、と言うことを。

ファラジュで言わんとする事は勝利である。即ちイスラームにより勝利者として戻るのである。また言う。

人々の集団に対して、彼等の宗教と私はアッラーの中で並び合っていた。  
彼等の宗教は、私の宗教でなく、彼等の輪は私の輪ではない

「並び合っていた」の意味は、「異なっていた」と言うことで、「輪」で言わんとする事は「相違」であり、即ち言われている様に、その輪は、その形、その階層ではないということである。また言った。

私は、娯楽や葡萄酒を熱愛する男だった、私の若さが、身体に喘ぎを發するまでに。

この詩の行には、彼がイスラームに改宗した時、神の使徒に語ったことが述べられていて、神はその代価に、神が認めた者にしか与えない恵みを彼に与えた。するとマーゼンの状況は最も良い状況に変わった。つまり彼があたかも彼の感謝を表現し、神が彼に認め、そのことで彼を助けた恵みの想起を明言しているかの様である。つまり彼の主が(偶像)ナージルである代わりに、彼の主は偉大なるアッラーとなった。神は快樂の代わりに彼にクルアーンの朗誦を与えられ、その章句を暗記させたのだった。この事が、サアディ族の長老(マーゼン)、彼に神の慈悲があらんことを、にとつて幸運であった。

マーゼンが言った：

私に、葡萄酒の代わりに安全と恐れを、姦淫の変わりに貞操を与え賜い  
私を姦淫から守ってくれ給わんことを。

聖戦に関心を持つ者となり、意図するものとならんことを  
神の為に私の断食はあり、私のハッジ(メッカへの大巡礼)も神の為にある

これは、特別の感謝から生じたもので、神の恵みを思うことが感謝である。(貴方の主の恵みによることについて言えば、それが実現したのである)。

彼(イマーム)が言った。「翌年神の使徒と彼の家族の処へ私が赴いた時、この事はマーゼンが2年目に神の使徒の処へ戻ったことを示しているが、マーゼンが神の使徒にオマーンの民の状況について話したのだった。私が言った。「嗚呼、祝福された人達の子の祝福された人よ、良き人達の子の良き人よ！神はオマーンの民の或る部族を導き給い、貴方の宗教によって彼等を祝福された。オマーンは恩恵を受けた肥沃の地となり、オマーンの商いの利益、漁獲は多くなつた」。そして彼(預言者)、彼に神が祝福と平安を与え給わんことを、は言った、「私の宗教は、イスラームの宗教だ。神はオマーンの民に土地の肥沃と漁獲を増やし給うだろう。つまり私を信じ、私を見る者には祝福がある。私の伝聞を信じて、私を見ず、私を見た者を見なかつた者には、祝福に重なる祝福がある。神はオマーンの民にイスラームを更に与えるであろう」。即ちイスラームは、オマーンの民の誰にも普及するように広がるであろう」。そして事実そうなのである。

オマーンに残っていたペルシャ人達の情報には、次の様な事が記されていた。即ち、イスラームが来

て、アラビア半島に拡がり、神の使徒がペルシャ王キスラー・アブルウィズ・ブン キスラー・アヌーシャルワーンに手紙を書いて、イスラームへの改宗を彼に呼び掛けた。王は預言者の手紙を引き裂いた。その事が預言者に伝わると、預言者は言った。「嗚呼、神よ、王の諸々のものを完全に引き裂き給え」。

預言者、そして彼の家族に神の平安があらんことを、彼の呼び掛け以降、王キスラーに幸いすることは無かった。つまり神は彼に、王の息子を仕向け、彼を殺したのであった。この息子というのが、シーラワイフであり、それからこのシーラワイフが預言者の命に関心を示し、自分自身の身に起こる事に恐れを抱き、オマーンにいる自分の代行者で、その名をバーザーン、又はフストハーンとも言われる者―彼はオマーンにおける彼等(マルジバーン族)とは別の独立したマルジバーンで、その呼び名、マルジバーンはペルシャ人に対しての慣習に沿った言い方によるものである―(上述の者に対して)手紙を書き、その手紙の中で彼に対して次の様に述べた。

「君の手で、アラブ系ペルシャ人の男を1人、即ちアラビア語をペルシャ語で表現出来る男、両方を上手に出来、信用出来る者、つまり言うことが信頼出来る者で、天啓の書を既に読んでいる者、即ち預言から与えられる恵みについて知識を持つ者を派遣するように言った。そしてその者をヒジャーズへと派遣し、今ではその情報が世界に知れ渡っているこのアラブの預言者の事について確認させる様に、と言った。

そこでバーザーン、フストハーンとも言われている者が、ターヒヤ族の者で、カーブ・ブン・バルシャ・アッタアヒイという男を派遣した。彼はキリスト教徒で、既に聖典を、即ちキリスト教の聖典を読んでいて、このカーブが、マディーナに行くと、預言者がやって来て声を掛けられたが、そこで聖典の中に発見出来る表現を見たのだ。それで彼が使徒であり、預言者であると分かった。預言者が彼にイスラームを示し、カーブはムスリムになり、それからオマーンに戻り、オマーンで2番目の教友となったのであった。

(イマームは)言った。「(カーブは)バーザーンの元にやって来て、彼に告げたのは、その預言者は使徒であり、預言者だということだった」。そしてまた彼(バーザーン)は言った。「これは、私が王に直接伝えようと望んでいた事である」。

彼はオマーンにいる自分の側近達に対して、彼の部族からマスカーンという一人の男を(留守中の)後継者にし、前述の預言者に関して世界が耳にしている事について、彼(ペルシャ王)に語るために、バーザーンはペルシャにいるキスラー王のところへペルシャ人(カーブ)と出掛けていった。それから神の使徒がオマーンの民に手紙を書いたこと、即ちイスラーム(への改宗を)呼び掛けたのであった。

当時オマーンの王はジュルンディー・ブン・ムスタクバルであった。神の使徒がこの王に手紙を書き、彼とまたオマーンの人々の中で彼と一緒にいる者をイスラームへと呼び掛けた。それから布教者に応えた。そしてオマーンにいるペルシャ人達に使者を送った。この人々は、ゾロアスター教徒だった。つまり人々をこの宗教(イスラーム)に信仰告白するよう呼び掛け、ムハンマドの呼び掛けに答える様に呼び掛けた。そして彼等は拒否した。それでジュルンディーが彼等を強制的に卑屈にさせオマーンから出て行かせた。即ちオマーンから出て行くよう彼等を強制した。何故なら、その宗教へ入ることは受け入れられなかったからであった。彼等はオマーンから出て行かざるを得なかったのであった。と言うのは、オマーンではアラブが彼等より強かったからで、諸事は、オマーン人に帰することになっていたからであった。

イマームが言った。「他の者が言った。預言者、彼と彼の家族に神の祝福と平安があらんことを、彼はオマーンの民に手紙を書いてイスラームへと招いた。そしてリーフ(原意:田園)の民には、その中にはジュルンディーの二人の息子であるアブドとジャイファルがいて、この二人の父親は当時既に亡くなっていた」。

私(イマーム)が言ったのは、「ジュルディーが最初にイスラームへ招かれた者で、招いた者に返事をしていただけで、それから彼が死んだので、預言者がアブドとジャイファルに手紙を出した。もしくはジュルンディー、この呼び名はジャーヒリヤ時代のオマーン国王の全てに対する敬称として有名で、全てのイエメン王にタブウ、エジプトの全ての王にファラオ、全てのローマの王にカイサル、全てのペルシャ王にキスラーと言う、等々の様なものであった。

(預言者は)言っている、つまりオマーンの民への彼(預言者)の手紙の中でのことであったが、「最初に、アッラーのほかには、神はなし、私、ムハンマドは神の使徒である、という信仰告白を認めて告白しない、ザカートを施さない、モスクを建てなさい、さもなければ汝達を攻撃する」。

この語りの中で、札拝については述べられていなかった、恐らく理解されていたからであろう。ザカートは決められていた。何故ならそれは財政的なことであったからであった。人々の心の中にあるお金に関する吝嗇さは知られていたからであった。そして我々が述べた事に関しては、彼のモスク建設の命令が指し示している。つまりモスクは、(お金の掛かるものだけでなく)札拝のためのものだった。(イマームが)ワーキディから伝え聞いて言った。「預言者は、オマーンに居たアズド族のジュルンディーの2二人の子のジャイファルとアブドに手紙を書いて、アマル・ブン・アルアース・ブン・ワーイル・アルサフミーに彼の手

紙を持たせて、その二人の処へ派遣した。彼の手紙のページは、手の平の幅以下のもので、その本文は以下の様なものであった。

「慈悲深き、慈愛あまねきアッラーの御名において。神の使徒ムハンマドより、アルジュンディの2人の息子のジャイファルとアブドへ、正しき導きに従う者に平安あれ、さて、私は、汝ら二人をイスラームの布教により、呼び掛ける。イスラームに改宗し、受け入れよ。私が入りたる神の使徒であり、生きとし生けるものに警告し、不信心の者達に対する言葉が真のものである、とするために(使わされた者である)。正に汝ら二人がイスラームに信仰告白するなら、汝ら二人を(オマーンの)総督に任じよう。そしてもしイスラームに信仰告白することを拒むなら、汝ら二人の王権は、汝ら二人から無くなることになり、私の馬が汝ら二人の土地を踏みつけ、私の予言は、二人の王権に勝利するだろう。」

この(手紙の)書き手は、アブー・ブン・カーブで、彼(預言者)が自分の言葉を聞き書きさせた人である。彼は手紙をページはたたみ、祝福された彼の指輪でそれを封印した。その指輪の彫り物は、アッラーの他に神はなし、ムハンマドはアッラーの使徒である、であった。この語りの中には、クルアーンの中にある様に、人々皆へのメッセージによる預言者からの声明があった。そして警告は(預言者が)送った全てからなっていた。イスラームへの信仰告白そのものは、信仰告白者をムスリムとし、諸事を担い、宗教に責任を持つことである。又イスラームへの同意の拒否には、拒否者には戦いが与えられる。それは、イスラームが不公平なものでなく、甘言でだますものでなく、真理(神)が必要とするもの以外にイスラームの施策はない、という声明を含んだものであるが、何であろうと、それを拒否者には戦いが与えられる。そして信仰告白した者はその血、その財産は聖なるものとされる。不信心の為に明らかに出来ない限りには、その財産が法的に認め許せるものでないと言うことから、不正に対して戦うのである。不信心の類と解釈出来る性質の者については、それを解釈する者について差異はあるが、ムスリムの財産を与えられないし、全くその獲得の方法も無い。既に神の使徒は、ジャイファルとアブドを、もし二人がムスリムにならなければ、二人の王権を除くと脅迫していた。またムスリム達の馬は、拒否する者と戦うことは避けられない。嘗て、アラブやその他の者が異教に固執する者と戦っていた。

イマーム、彼に慈悲があらんことを、彼が言った。「アマル・ブン・アルアースが預言者の手紙を持ってオマーンにいるジュンディの二人の息子アブドとジャイファルの処へ行った。彼が入った最初の場所はソハールのダスタジャルドであった。そこは、ジュンディと彼等が休戦状態のときに、ソハール内のペルシャ人が建設した町であった。そしてここへアマル・ブン・アルアースが正午に(その地に)降りて、ジュンディの息子の処へ使者を送った。彼等はオマーンの土漠に居た。多分彼等は内陸にいたのである。アラブ人は内陸に、ペルシャ人は沿岸にして知られている様に。また言っている。「最初に彼に会ったのは、アブド・ブン・ジュンディであった。彼が二人の男(兄弟)のうちで気質の優しい方の者、性格が二人のうち優れている方の者だった。そしてアマルは、彼を預言者の手紙をもって兄のジャイファル・ブン・アルジュンディ引き会わせた。そこで手紙を封印したまま彼に手渡し、彼が封印を破り、最後まで終わるまで読み、それを弟に手渡し、弟が兄と同じように読んだのであった。」

## オマーン王ジャイファルが預言の布教を調査する為の会議を開催(P.114)

ジャイファルが事の重大さを知り、その成り行きの結果を理解出来ない儘、その件が彼を恐れさせた時、その件を延期し、彼の顧問達を呼び集めた。

イマームが言った。「ジャイファルがアマルの方を向いて言った。「汝が呼び掛けているこの件は、小さなことではない」。言い換えれば(預言者のスペルの Ya の文字の下に二重点がある)預言者が呼び掛けている件の事であるが、汝の主からの言葉は、アマル・ブン・アルアースに託されたものだということを示している。彼こそが呼び掛けた人なのだ。」

ジャイファルが言った。「私はそれについて考え直し、汝に知らせよう」と。彼がアズド族の皆を呼び集めたので、皆の間で意見と知見が巡らされた。それで事は預言者の件に関する彼(下記的人物)の意見を求める為に、またその件を確認するため、カーブ・ブン・バルシャを要請することが必要になった。そこで彼の処へ人を派遣し、預言者の件について彼等は質問した。

するとカーブが言った。「その男は預言者で神から送られた人であり、私はその人となりを知ったが、アラブ人達とペルシャ人達に君臨する人になるだろう」。そこでジャイファルは事の真相が分かった後、イスラームへの改宗に応えた。つまり彼と弟は同時にイスラームに入信した。それからジャイファルは、自分の一族の主な面々に人を送り、彼等にムハンマドへの忠誠を誓わせた。

私は言った「高位の人々がこのようになるのは、必然であった。真実を知った時、それに服し、それを助け、支援することになった。彼等はそれにとって高位の人々であり、密偵達であった。彼、即ちジャイ

ファルはその人々を彼の宗教に入らせ、施し(サダカ)与えるよう強いた。アマル・ブン・アルアースが、それを預言者が命じた様に、皆の前で施しを手にする様に(ジャイファルは)命じた。それからドバイとその近隣のオマーンの端まで、即ち海岸沿いの北の端まで使者を送った。

(イマームは)言っている。「ジャイファルの使いが訪れた者は誰であろうが、1人として、イスラームに改宗し、彼の呼び掛けに応えない者はなかった」。但し当時オマーン居た者達でペルシャ人は別であった。そしてアズド族の者達はジャイファル・ブン・アルジュルンディーの処へ集合し、今日以降、ペルシャ人達は我々の隣人ではないことにし、マスカーンと、彼らと一緒にいるダストジャルドに残っているペルシャ人達を出て行かせることに意見が一致した。

ジャイファルは、マルジバーン族と(アスワール)長老達を呼び、彼らに宣言した。「アラブ人達の中の我々の出自から預言者が遣わされたので、次の2つの条件、つまり我々が改宗した様にイスラームに改宗し、我々が入ったものに汝達が入ってくるか、我々の処から自ら出て行くか、どちらかの一つを選ぶように」。すると彼らは、改宗することを拒否し、自分達は出て行かないと明言した。

私は言った。「彼らに不運だったのは、マーリク・ファヒムと彼の側近達の時代以来、オマーンで彼等はアラブ人達と事を構えていた。そしてペルシャ人達は逆境に置かれ続け、敗北が止めどなく彼等に続いたのだった」。もし彼らがこの宗教に入っていたら、アラブ人達は彼等を好んだであろうし、オマーンにおいて彼等は固定した支援がある地位を持ったであろう。しかし彼は、彼等が全オマーンから出て行くことを要求した。

彼等がゾロアスター教に固執し、又容易にはオマーンから出て行かないことを確認した時、アズド族の者達は、彼等の追放のため会合をもった。それで彼等との戦いは避けられないものとなった。彼等に対して信仰の決意をもって、進軍した。彼等(ペルシャ人達、アラブ人達は)以前は、皆が偶像崇拜状態であったが、勝利はアラブのものであった。今やどうなのかと言え、アラブ人達は信仰に拠っているのだ。

互いに激しい戦闘を戦い合い、信仰を拒否し火を崇める事に執着する住民を殺戮し、又多くのマスカーンの側近達を殺し、同様にその軍の指導者達や、その将官達を殺した。残ったのはダストジャルドにある彼等の砦の中で立て籠もって残っていた者達だった。それから彼等に向かって既に死にもの狂いになって進軍していた。そして勝利が彼等(アラブ)に味方(同盟)してくれた。そして勝利の喜びの極みは、彼等の処を飛び回らんばかりであった。あらん限りの厳しい囲い込みで彼等を狭めて行き、その囲い込みが彼等にとって長くなったとき、彼等は自分達にはアラブ人達の言うことに従うしかないことを理解し、和平を求め、さもなければ少なくとも、助命の許可さえ求めたのであった。そこでアラブ人達は彼等にオマーンから決定的に出て行くことに条件をつけて同意した。

条件は、黄色い(黄金)、白い(銀貨)、アクセサリー、家畜を残していき、彼等を同居家族、使用人と共に船に乗せて、ペルシャの地に渡るところまで運ぶことであった。すると彼等はそれに応じてオマーン全土から出て行った。それが彼等のオマーン時代の最後だった。但し、日々がオマーンへ帰ることへと今なお誘っていたのであるが、つまり彼等は、オマーンで落ち着く幸運はなかった。彼等が侵略者として来る時は何時でも、必ず不運が彼等を一扫した。彼等がオマーンを攻撃する時、彼等には、つきまとう驚きと破壊を貴方は眼にすることになるだろう。諸事は神の意に従う。

(ヌール・アッディーン・アルハルビー書)「ハルビー伝記」の中でイマームが言っている、彼に神の慈悲があらんことを。「オマル・ブン・アルアースが言った。私は(マディーナを)出てオマーンに行き着き、アズドの処へ行った」。彼は二人のうち優しさに勝れ、即ち二人のうちおとなしく、性格の刺々しくない男の人であった。私は述べた。「私は、神の使徒の使いであり、貴方と貴方の兄の処に来たのです」。すると彼が言った。「彼の方が年をとっており、王です。即ち彼は私より年上で、彼が王なのです。私が貴方を兄の処にお連れします。彼が貴方の書簡を読む為に」。